

## <論文>

# 育児に関するネガティブな感情をもつ父親に対する NICUスタッフの関わり

川合美奈\* 三国久美\* 木浪智佳子\* 川崎ゆかり\*

### 抄録:

<目的> 育児に関するネガティブな感情をもつ父親に対するNICUスタッフの関わりを明らかにする。

<方法> NICUスタッフ433名に対して質問紙調査を実施した。そのうち、育児に関するネガティブな感情をもつ父親への関わりの具体的な記述があった182名を分析対象とした。

<結果・考察> 父親への関わりとして、NICUスタッフは【父親の気持ちを確認】し、【父親の今ある不安を解消する】ために声掛けや説明をしていた。そして、個々の【父親のペースですすめ】、【父親が育児手技を獲得できるように】していた。また【父親が育児に前向きになれるように】していた。これらの関わりは、【夫婦で育児ができるようにする】ことを目指すものであった。関わりをしない理由は、NICUスタッフが父親への関わりをし難い様々な要因があることが考えられた。この状況を改善するためには、父親が面会しやすい環境づくりと、父親に関する具体的な援助方法の学習機会をNICUスタッフに提供することが必要であると考えられる。

キーワード：NICU、父親、育児、看護

## I. 緒言

新生児特定集中治療室（以下NICU）へ入院する児は、医療措置を講じられていることが多く、その身体の小ささや、弱々しさは両親にネガティブな感情を生じさせ、育児ストレスを高めることが明らかになっている（濱田、2000）。母親が出産直後に面会できない場合、第一面会者の多くは父親となる。関森（2006）によると、NICUに入院する早産児の父親は、驚き、不安、恐怖といったネガティブな感情を抱き、父親としての実感を得にくい。しかし、ネガティブな感情を感じつつも、児との関わりを続けることで、父親にとっては我が子という認識が生じ、父親になった自分という自覚が強化される、とされる。また、桑名ら（2008）による育児ストレスに関する研究によると、親機能に関する育児ストレスは夫婦間での関連が強いため、親への支援は一方の親を対象とした支援ではなく、両親を対象とする必要がある

ことが示唆されている。そのため、母親だけではなく、父親へのNICUに勤務する看護職（以下NICUスタッフ）による継続的な働き掛けは重要であると考えられる。しかし、その実態は明らかではない。そこで、ネガティブな感情をもつ父親に対するNICUスタッフの関わりを明らかにすることを本研究の目的とした。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

北海道内のNICU病床を有する22病院に勤務するNICUスタッフ433名を対象とした。

### 2. 調査方法

郵送法による無記名の質問紙調査を実施した。調査期間は2012年6月から7月である。

### 3. 調査項目

NICUスタッフの属性として、性別、年齢、看護師の勤務経験年数、NICUの勤務経験年数、職種について尋ねた。“父親の育児に関するネガティブな感情を軽減す

\* 母子看護学講座 小児看護学

る関わりをしたか”と尋ね、「はい」「いいえ」の二択で回答を得た。さらに、NICUスタッフが関わった場合は具体的な内容、関わらなかった場合はその理由について、自由記述形式で尋ねた。なお、本研究に用いた調査項目は質問紙調査の一部である。

#### 4. 分析対象者

質問紙を回収できた230名（回収率53.1%）のうち、“父親の育児に関するネガティブな感情を軽減する関わりをしたか”の設問に「はい」と回答し、具体的な関わりの内容について記述があった142名、および「いいえ」と回答し、その理由の記述があった40名、合計182名を分析対象者とした。

#### 5. 分析方法

共同研究者とともに、質問紙の自由記述部分の記載内容から、具体的なNICUスタッフの関わりを示す記述部分の意味が類似する内容ごとに集約し、共通する意味を示すようにサブカテゴリを抽出した。さらに意味内容が類似したサブカテゴリを集め、抽象度の高いカテゴリとした。ただし、NICUスタッフが関わらなかった理由については、40名分と少なく、記述内容も短文で意味を汲み取ることが困難であった。そのため、類似する内容の分類のみを行った。

データの分析は共同研究者間で確認しながら進め、妥当性を確保するように努めた。

#### 6. 倫理的配慮

研究の実施にあたり、本学研究科倫理委員会の承認を得た。また、調査対象者には研究主旨の説明、個人情報の保護、途中撤回の自由等について、書面により説明を行い、質問紙の返送をもって同意したとみなすことを説明した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 調査対象者の属性

NICUスタッフの属性は、女性が99.4%、年齢は20歳代が38.1%、看護師の経験年数は10年以上が52.8%、NICUの勤務経験年数は3年未満が35.4%であった。職種は看護師・准看護師が78.5%であった（表1）。

#### 2. 父親の育児に関するネガティブな感情を軽減するために実施したNICUスタッフの関わり

“父親の育児に関するネガティブな感情を軽減する関わりをしたか”の設問に「はい」と回答したNICUスタッフ142名の関わりとして、6つのカテゴリが抽出された（表2）。

以下、カテゴリの内容を説明する。なお、「」は自由記述部の記載内容、<>はサブカテゴリ、【】はカテゴ

表1 NICUスタッフの属性

		(N=182)
項目		n (%)
性別		
男性		1 (0.6%)
女性		180 (99.4%)
年齢		
20歳代		69 (38.1%)
30歳代		59 (32.6%)
40歳代		49 (27.1%)
50歳代以上		4 (2.2%)
看護師の勤務経験年数		
3年未満		21 (11.7%)
5年未満		26 (14.4%)
10年未満		38 (21.1%)
10年以上		95 (52.8%)
NICUの勤務経験年数		
3年未満		64 (35.4%)
5年未満		43 (23.8%)
10年未満		49 (27.1%)
10年以上		25 (13.8%)
職種		
看護師・准看護師		142 (78.5%)
助産師		39 (21.5%)

りを示す。

#### 1) 【父親の気持ちを確認する】

【父親の気持ちを確認する】は、父親の気持ちを確認するためにNICUスタッフが行う関わりであった。

<父親の様子を観る>とは、「不安、苦痛、恐怖などのネガティブな感情について言動の有無を確認する」ことや、「具体的に何についてネガティブな感情を抱いているか確認する」こと等であった。

<父親の気持ちを聞く>とは、「不安とか思っていたら、どんな所が不安か、とりあえず話をきいてみる」ことや、「なぜそのように感じるのか、思いを傾聴する」こと、「父の意思を尋ねた」こと等であった。

<父親と話し合う>とは、「父親本人と話をする」ことや、「どういうことが不安なのか、どこまでならやれそうなのか話し合う」こと等であった。

#### 2) 【父親の今ある不安を解消する】

【父親の今ある不安を解消する】は、父親が抱く不安を解消するための様々なNICUスタッフの関わりであった。

<児の様子を説明する>とは、「面会時間外の児の様子を伝える」ことや、「子どもの日々の成長や1日の様子を伝える」こと等であった。

<父親の不安を解消できるように説明する>とは、「自分は汚い仕事をしているので、ばい菌がつくと困るや、

表2 父親の育児に関するネガティブな感情を軽減するためにしたNICUスタッフの関わり

カテゴリ	サブカテゴリ
父親の気持ちを確認する	父親の様子を観る 父親の気持ちを聞く 父親と話し合う
父親の今ある不安を解消する	児の様子を説明する 不安を解消できるように説明する 不安を解消できるようにICの調整をする 不安が解消できるように一緒に考える 不安を軽減するように声掛けをする
父親のペースですすめる	無理に勧めない 児の成長を待って勧める 少しずつ勧める 気持ちに合わせて勧める 出来ることから勧める
父親が育児手技を獲得できるようにする	手技の指導をする 手技を見せる 手技をしてもらう 一緒に手技を行う 手技を再度行う
父親が育児に前向きになれるようにする	児の反応を見てもらう 児の気持ちを代弁する 児との触れ合いを促す 自信が持てるように声掛けをする 一生懸命にしていることを認める 何度もやれば出来ると伝える 手技が出来ていることを伝える 手技を褒める
夫婦で育児ができるようにする	父親として母親をサポートできることを説明する 父親として育児に参加する必要性を説明する 母親から父親に育児参加を勧めってもらう

こわれそうで怖い等の、児を抱くことや、小さな児へ関わることへの恐怖に対して、説明した」ことや、「自分の分かる範囲で説明等行う」こと等であった。

<父親の不安を解消できるようにICの調整をする>とは、「必要時、医師にICしてもらえよう配慮した」こと等であった。

<父親の不安が解消できるように一緒に考える>とは、「解消方法を父と共に考える」ことや、「不安や恐怖心があるが、それを取り除くことで参加したいのであれば方法を考える」こと等であった。

<不安が軽減できるように声掛けをする>とは、「安心するような声掛けをした」ことや、「しっかりと支えてあげれば大丈夫、今に慣れてきますよ等と声掛けをした」こと等であった。

### 3) 【父親のペースですすめる】

【父親のペースですすめる】は、父親の主体性に合わせることを考えたNICUスタッフの関わりであった。

<無理に勧めない>とは、「ネガティブ感情が強い場合

には無理に勧めない」ことや、「時期については強制するのではなく父親の自主性に任せる」こと、「実際にやること自体を強制しない」こと等であった。

<児の成長を待って勧める>とは、「体重がまだ小さいうちは恐怖があるとのことで抱っこを拒否することがあり、体重が増えて時期を待ってからすすめる」ことや、「児が大きくなれば自然と父の不安も減少するため」等であった。

<少しずつ勧める>とは、「育児手技獲得が思うようにいかない場合は、焦らずゆっくり覚えればいいことを伝える」ことや、「父の不安が軽減できるように、できるところを少しずつ、短時間実施している」こと等であった。

<気持ちに合わせて勧める>とは、「父親が児に接することに対し、恐怖の感情を表出した場合はその恐怖が軽減するのを待って児の育児を促す」ことや、「父親が愛着がわき、不安が軽減されていく中で育児ケアの参加を促した」こと、「不安がなくなるまで指導する」こと等

であった。

<出来ることから勧める>とは、「育児行為を全部するのではなく、出来る所だけやってもらう」ことや、「出来る範囲でタッチングや抱っこなどをすすめる」こと等であった。

#### 4) 【父親が育児手技を獲得できるようにする】

【父親が育児手技を獲得できるようにする】は、段階を踏んで育児手技を獲得できるようにNICUスタッフの関わりであった。

<手技の指導をする>とは、「哺乳、オフロ、抱っこが怖いと言われた時、手技の指導をした」ことや、「沐浴等で泣かれる事や体動が多くて不安がる時に、落ち着く工夫を指導する。タオルでしっかりくるんだり、頭をお湯につける等する」こと、「児が小さく抱っこや育児が落ち着かない。授乳クッションの使用や抱き方を説明して、安定感があるようにする」こと等であった。

<手技を見せる>とは、「抱っこするのが怖いという言葉が聞かれた時は、抱き方を見せる」ことや、「哺乳びんでの授乳の仕方、おむつ交換、抱っこを実際に見せた」こと、「はじめに自分が実施して、見てもらう」こと等であった。

<手技をしてもらおう>とは、「赤ちゃん怖いと言っていたが、毎日面会に来てくれていたので、おむつ交換、びん哺乳を行って自信をつけて貰った」ことや、「抱っこやおむつ交換、授乳を出来る限り行ってもらった」こと、「必要時、病棟で練習する機会を設けた」こと等であった。

<一緒に手技を行う>とは、「抱っこ、タッチング、おむつ交換など父親が面会に来た時にできることを一緒に行った」ことや、「ビン授乳やおむつ換え等の技術的な不安は共に実践をする」こと、「そばに付き添いすぐに介助できることを伝える」こと、「1回だけではなく、不安がるのなら数回そばについている」こと等であった。

<手技を再度行う>とは、「父親が、自信がないと話された育児手技に対し、再度見学や実施をした」ことや、「もう一度一緒に実施し、不安を軽減してもらう」こと等であった。

#### 5) 【父親が育児に前向きになれるようにする】

【父親が育児に前向きになれるようにする】は、父親の自信ややる気を高め、ポジティブな気持ちで育児に取り組めるようにNICUスタッフの関わりであった。

<児の反応を見てもらう>とは、「子どもの反応を見てもらい、自分の行った育児をポジティブに受け止められるように配慮する」こと等であった。

<児の気持ちを代弁する>とは、「おむつ交換や抱っこなど触れることが怖いと話触れるのを最初断っていた

時、触れることで赤ちゃんも父のぬくもりを感じることができると、きっと赤ちゃんも嬉しいですよと伝えた」ことや、「児にとっては気持ちよかったことを伝える」こと等であった。

<児との触れ合いを促す>とは、「児との触れ合いを多くできるように、抱っこやおむつ交換の参加を促した」ことや、「低体重児に触れるのが怖いという父親が多いため、スタッフが一緒にタッチングから始めた」こと、「今までやった事がなくて怖いという父親に対して、児との触れ合いを多く持てるように心がけた」こと等であった。

<自信が持てるように声掛けする>とは、「沐浴や抱っこ等父親の方が、手が大きく赤ちゃんも安心すると伝えた」ことや、「児の状態により、父の気持ちが前向きになるような声掛けを行った」こと等であった。

<一生懸命にしていることを認める>とは、「すごく不器用で時間がかかっても、一生懸命にしている姿勢を受け止めた」ことや、「その父親だけでなく、他の父親も一緒であることを話した」こと等であった。

<何度もやれば出来ると伝える>とは、「上手く技術ができないことについて不安があったが、何度もやれば自然とできるようになることを伝えた」こと等であった。

<手技が出来ていることを伝える>とは、「不安を抱きながらも育児手技を行っている時は出来ていることを言葉にして伝えていった」ことや、「出来ていることを伝え、自信を持ってもらう」こと等であった。

<手技を褒める>とは、「父親ができていること、もっと上手に出来る方法を伝えた」ことや、「安全に出来ていることなどは伝えて自信を持てるように関わる」こと、「出来ていることを伝え褒める」こと等であった。

#### 6) 【夫婦で育児ができるようにする】

【夫婦で育児ができるようにする】は、父親役割を意識してもらうようなNICUスタッフの関わりであった。

<父親として母親をサポートできることを説明する>とは、「母と一緒に手技が獲得できるようにしたり、育児手技だけでなく、母をサポートしたり、仕事を頑張ってもらっても父として出来ることではないかということ伝えるようにしている」ことや、「一人であれば二人で沐浴を行うと負担も少なく済む等の声掛けをする」こと等であった。

<父親として育児に参加する必要性を説明する>とは、「母の思いや習得の必要を伝えた」こと等であった。

<母親から父親に育児参加を勧めてもらう>とは、「母から触れ合いや育児をすすめてもらう」こと等であった。

#### 3. 父親の育児に関するネガティブな感情を軽減するための関わりをしなかったNICUスタッフの理由



父親の育児に関するネガティブな感情を軽減する関わりをしていないと回答したNICUスタッフは、40名であった。以下、類似する内容を [] で示す。

[全ての父親に対して関わる時間がない]、[接した父親の中にネガティブな感情をもった人がいない]、[父親自身が解決するため]、[夫婦で解決するため]、[父親に無理に強いることはできない]、[自分が育児指導に慣れておらず、関わりまで考える余裕がない]、[父親への関わり方がわからない]、[母親と関わるのが主で、父親のフォローにまで手が及ばない]であった。

#### IV. 考察

##### 1. 父親の育児に関するネガティブな感情を軽減するためにしたNICUスタッフの関わり

NICUでは、スタッフも女性が多く、長時間面会をしている親の大半は母親という環境である。樋貝 (2008) によると、生後1ヵ月の子どもの父親の10%がうつ状態である。そして、子どもの異常は両親の育児ストレスを高めることが、桑名ら (2008) の研究でも明らかになっている。このことから、わが子の様子を心配しつつ、NICUに面会に訪れる父親は心理的緊張が強いことが窺える。仕事の都合で、頻回に面会に来ることができなければ、NICUスタッフや病棟の環境に慣れることも容易ではない。仮に、父親が児や育児に関してネガティブな感情を抱いていたとしても、それを表出できるような関係性をNICUスタッフと築く時間や気持ちの余裕が、父親自身にないことが考えられる。しかし、そんな状況にある父親に対しても、NICUスタッフは行動を起こしていた。

まずNICUスタッフは、父親の話を傾聴したり、話し合ったり、様子を観る等して【父親の気持ちを確認】しようとしていた。

そして【父親の今ある不安を解消する】ために、児の様子を説明したり、一緒に考えたり、声掛けをしていた。

さらに、児の小ささから抱く恐怖感情を和らげるために成長を待つことや、父親の意欲が高まらないうちに無理に勧めない、父親のできることから勧める等の配慮をしつつ、個々の【父親のペースですすめる】ことを大切にしていた。これは、ケアを行っていくうえで児への否定的な感情が増えることもあるため (三ツ木, 2009)、それを防ぐ関わりであると考えられた。

そして、父親の意欲が高まりつつあることを感じ取ると、育児手技の指導をする、育児手技を父親に見せる、育児手技を父親にしてもらい、不安を訴えれば一緒に育児手技を行ったり、再度行ったりと不安を増強しないように段階を踏みながら、【父親が育児手技を獲得できる

ように】していた。父親としての実感のきっかけが、抱っこ、授乳、おむつ交換、タッチングにあることから (三ツ木, 2009)、このような関わりはネガティブな感情をもつ父親に、単に手技を修得するだけではなく、父親としての実感をもてるようにするための働きかけになっていると考える。

また、父親に児の反応を見てもらったり、児の気持ちを代弁することで喜びを感じてもらい、児との触れ合いを促すことで、父親としての実感を高め (関森, 2006)、父親が育児手技に自信をもてるように褒めたり、励ましていた。これは【父親が育児に前向きになれるようにする】ことに繋がっていたと考える。

これらの関わりは、父親の育児に関するネガティブな感情の軽減だけでなく、【夫婦で育児ができるようにする】ことを目指すものであった。育児に対する夫の役割認識が育児への協力面に左右する (渡邊, 2004) ことから、NICUスタッフが父親として出来ることがあると伝えることで、父親の育児に対する意欲や母親に対するサポート意欲を高めていた (宮武, 2007) と考える。

父親とNICUスタッフの関わり頻度は、母親よりも少ないことが推測される。安藤ら (2006) の面会に関するNICUスタッフの思いを調査した研究では、親との対面機会が少ないことで逃げ出したい気分になることや、自分の発する言葉の重圧感を感じるNICUスタッフがいることが明らかにされている。NICUスタッフ自身も、そのようなネガティブな感情を抱きつつも、親子接触の積み重ねが子どもへの恐怖感の軽減になるとの期待を持ち、父親に関わろうと取り組む様子が垣間見えた。

##### 2. 父親の育児に関するネガティブな感情を軽減するための関わりをしなかったNICUスタッフの理由

父親に関わらない理由の記述内容を確認したところ、[全ての父親に対して関わる時間がない]、[接した父親の中にネガティブな感情をもった人がいない] といった理由が明らかになった。これは、父親との接触時間の少なさが原因であり、ネガティブな感情を抱く父親の存在を認識していても接触できない、もしくは父親がネガティブな感情を抱いていることに気付くことができないといった状況を反映したものと考えられた。

また、[父親自身が解決するため]、[夫婦で解決するため]、といった理由は、父親のネガティブな感情の解消に関してはNICUスタッフが介入すべきではない、もしくは介入できないと認識しているのではないかと考えられた。

さらに、[父親に無理に強いることはできない]、[自分が育児指導に慣れておらず、関わりまで考える余裕がない]、[父親への関わり方がわからない]、[母親と関わ

ることが主で、父親のフォローにまで手が及ばない] といった理由があった。これは、父親がネガティブな感情を抱いていることは認識していても、NICUスタッフが解決を主導することが難しい、もしくはNICUスタッフ自身に余裕がなく、関わるできないと認識しているのではないかと考えられた。

いずれの理由も、NICUスタッフが父親への関わりをし難い様々な要因があることが考えられた。この状況を改善するためには、父親にとって面会しやすい環境づくりが必要である。さらに、NICUスタッフが父親の状況や心理を学習する機会を提供することで、父親と関わるための準備ができる。このような対策を講じることで、父親に関わりにくい意識(安藤、2006)を少しでも軽減することが可能であると考えられる。

また、20歳代のスタッフや、NICUの勤務経験年数3年未満のスタッフが多いことから、自身の育児経験がないスタッフが、児や父親に合わせた育児指導を実施しなければならない状況にあることが推測される。そのような状況を考えると、父親との関わり方や育児指導に慣れないスタッフに対しては、具体的な援助方法の学習の機会が必要であると考えられる。

## V. 研究の限界

本研究は、質問紙調査の一部である自由記述内容の分析であり、記述内容の意図の読み取りには限界があった。父親の育児に対するネガティブな感情は、父親の背景や児の状況により異なることが予測される。また、父親がNICUスタッフにどのように関わってほしいと願っているのか、そのニーズを知ることもできていない。

今後はNICUスタッフや父親へのインタビュー、参加観察によるデータ収集と分析が必要である。

## VI. 謝辞

本研究にご協力いただきましたNICUスタッフの皆様  
に感謝いたします。

本研究は、北海道医療大学看護福祉学研究科修士論文  
の調査の一部を分析したものである。また、乳幼児保健  
学会第7回学術集会で発表した。

## VII. 文献

- 安藤晴美・岡部恵子, 親子家関係形成に向けての面会に  
関するNICU看護師の思い, *Yamanashi Nursing Journal*,  
4(2), 47-57, 2006.
- 濱田美代子, NICUに入院した極低出生体重児の父親の  
心理状態について－出生後早期における児の受容状  
況－, *小児保健研究*, 59(3), 440-444, 2000.
- 樋貝繁香・遠藤俊子・比江島欣慎・塩江邦彦, 生後1カ  
月の子どもをもつ父親の産後うつと関連要因, *母性衛  
生*, 49(1), 91-97, 2008.
- 桑名佳代子・桑名行雄・細川徹, 1歳6歳児をもつ親  
のストレス(2)－両親間における育児ストレスの関  
連－, *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 57(1),  
339-358, 2008.
- 三ツ木愛美・角山智美・深谷悠子・小林美幸・大野美津  
江, NICUにおける父性育成に向けた援助と対児感情  
の変化, *日農医誌*, 58(2), 90-93, 2009.
- 宮武典子, NICUに入院していた児を育てている母親の  
夫のサポート・ピアサポートと育児不安および対処方  
略の関連, *日本看護研究学会誌*, 30(2), 97-108, 2007.
- 関森みゆき, NICUにおいて早産児の父親が育む我が  
子との関係性, *日本新生児看護学会誌*, 13(1), 2-7,  
2006.
- 渡邊タミ子・樋貝繁香, 育児に対する夫婦の役割分  
担観とその満足度に関する研究, *Yamanashi Nursing  
Journal*, 2(2), 37-44, 2004.

# Nursing Care at NICU for Fathers Who Have Negative Attitudes toward Child-rearing

Mina KAWAI\*, Kumi MIKUNI\*, Chikako KINAMI\*, Yukari KAWASAKI\*

**Abstract** : This study was to describe nursing care at NICU for fathers who have negative attitudes toward child-rearing. Out of 433 NICU nurses who responded to a questionnaire survey, 182 described their experience in interacting with fathers who had negative attitudes towards caring for their children. The descriptions of these nurses' experience were analyzed and summarized as follows. The NICU nurses first confirmed the attitudes of fathers toward child-rearing, and then gave advice to fathers in an effort to help eliminate their anxieties. In making such efforts, the NICU nurses expressed respect for the initiative of each father, helped fathers to acquire skills necessary for child-rearing, and tried to help foster positive attitudes in fathers toward child-rearing. These efforts aimed at encouraging fathers to work with their wives in caring for their children. At the same time, diverse factors make it difficult for NICU nurses to interact with some fathers.

**Key words** : NICU, Father, Child-rearing, Nursing Care

---

\* : Department of Child Health Nursing